

十字架のキリストを指差す者 — M・グリューネヴァルト、E・シュタイン、D・ボンヘッファー の信仰的実存 —

Drei Gestalten, die auf den gekreuzigten Jesum Christum wiesen

— M. Grünewald, E. Stein und D. Bonhoeffer —

橋本 裕明 *Hiroaki Hashimoto*

(デザイン学部)

0. はじめに

かの弁証法神学 (Dialektische Theologie) の唱道者であった改革派の神学者カール・バルトは、机上にグリューネヴァルトの「イーゼンハイム祭壇画」を置き、その第一面 (平日に提示) 中央に描かれた十字架上の断末魔のキリストをつねに見つめていた。彼は神の第二のペルソナであるキリストを神の絶対啓示であると固く信じ、画面上でこの受肉者を指差して「この方は強大となり、わたしは弱まるべきである」(Illum oportet crescere, me autem minui.; Joh.3.30) と語る洗礼者ヨハネの「告知」の役割を、自らも神学者としてなう覚悟を日々新たにしていた。そしてバルトはシュライエルマッハー以降の文化プロテスタンティズムの、信仰を「人間の経験と近代文化に基礎づけ」¹⁾、人間の価値水準を重視する自由主義神学 (Liberale Theologie) に対峙するかたちで、この北方ルネサンスの画家が描き出した凄絶な「磔刑」——もちろんその死は祭壇画第二面 (主日に提示) の永遠の光の源泉へと変容する「復活」と不可分であるが——に神の絶対啓示を読みとり、「神の言葉」(Wort Gottes) の神学の提唱とその展開²⁾に生涯を費やした。その底流には、救いにおける人間の無力と神の絶対性、イエス・キリストによる「危機」(限界) 状況にある人間の救いの唯一無二性の強調があり、バルトはこの思索によってキリスト教神学の上で偉大な貢献をなしたといわれる。本稿では、この洗礼者ヨハネ=バルトに見られるイエス・キリストの告知および信徒という観点から、救世主を同じように「指差した」歴史上の三人に光をあて、その信仰的実存のありように触れてみたい。まずはバルトが思想上のインスピレーションを受けた、十六世紀のドイツ宗教改革の精神的混乱期を生きた宮廷画家マティアス・グリューネヴァルト (Matthias Grünewald, 1460頃-1528) である。そして次に、二十世紀まで時代を下って、ドミニコ会修道女のエーディット・シュタイン (Edith Stein: 修道名テレジア・ベネディクタ・ア・クルーチェ, 1891-1942)³⁾、そしてバルトと親交を深めたルター派福音主義牧師のディートリヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer, 1906-1945) である。このカトリックとプロテスタントの二人の聖職者は、ナチス政治の暴虐の犠牲者としてともに強制収容所で殺され⁴⁾、キリストの福音

の証聖者となった人物である。

1. 画家グリューネヴァルトとそのキリスト磔刑像

1-1. イーゼンハイム祭壇画のテーマ

この画家の生涯は、ほぼ同時代の A・デューラー、P・ブリューゲル、H・ホルバイン、L・クラナハと比較しても不明な点が多い。その名前も早々と歴史から消え、ようやく前世紀になって、絵画上に残されたモノグラムから、マティス・ナイトハルト (Mathis Neithardt) であることが判明したところである。また遺した作品も多くはなく、40点ほどを数えれば足りてしまう。そうした中であって、彼は横 5m、高さ 2.65m の大作「イーゼンハイムの祭壇画」を遺した。これは 9 枚のパネル画からなる可動式多翼祭壇 (さらに彫像も含む) であり、アルザスの一地方都市イーゼンハイム (かつての神聖ローマ帝国西南部の小都市) の聖アントニウス修道院に収められたものである。この祭壇画は、キリスト教の神秘主義的靈性に深く裏打ちされて、一方で十字架刑の残虐、陰惨を仮借なく描き出し、他方では復活の超時間的な幻想空間を現出させ、さらに「聖アントニウスの試練」をモチーフとして魑魅魍魎を画面上に呼び出した、驚嘆すべき壮大な構想の作品である。その画面に示された一筆一筆にまで、制作者の純粹な信仰は深く浸透して、画家の類まれなる想像力と構想力と相俟って、定式化した宗教図像を「信仰的いのちの書」に甦らせている。

それではこの大祭壇画はいかなる経緯で成立したのであろうか。それは、第三面の向って右側にある「聖アントニウスの試練」のパネルの左下部に描かれているものが暗示している。これは妖怪とか怪物と読む向きもあるが、むしろ同場面の複数の魔物の形象とはちがって一人の人物と見え、麦角中毒⁵⁾に侵されて足が壊死した状態にあると解することができる。その尋常でない痛苦ゆえに意識はもはや正常ではなく、彼は朦朧状態にある。この祭壇画は、R・マルカルトによれば、1512~15/16年の間にイーゼンハイムで制作され⁶⁾、その注文者は、聖アントニウス修道会イーゼンハイム修道院長ジャン・ドルリエの後継者ガイド・グエルシ (Guido Guersi) であった⁷⁾。グリューネヴァルトは当時すでにマイッツ大司教ウリエル・フォン・ゲミンゲンの宮廷画家であり、彼に制作が依頼された点からして、その宗教画の評価はきわめて高いものであったと推測される。ドルリエは十四世紀初頭この地 (ローマ巡礼やスペイン・ガリシアのサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼に向かうローマ街道の途上) に開設された修道院を発展させた立役者であり、その姿は第三面に修道服姿の彫刻像としてとどめられている。この彼がこの祭壇の木彫像の制作を依頼した可能性があるとされている。それ以外の各パネルの絵画は、グエルシがグリューネヴァルトに発注したようである。

さてこの祭壇画のテーマは、麦角中毒である。この病はライ病、梅毒、ペストとならぶ難病であり、とりわけ聖アントニウスがこの難病から庇護し、治癒をもたらす聖人として

崇められていた。そのため麦角中毒は「聖アントニウスの火」とも呼ばれた経緯がある。グエルシ修道院長はグリューネヴァルトに、患者がこの祭壇画の前にひざまずいて祈ることができるようにと、その制作の意図を明確にして、契約を交わしたと考えられる。

1-2. 磔刑像のインパクトと鑑賞者の想像力

聖アントニウス修道会はもともと病者への奉仕を目的として創設されたのであり、このイーゼンハイム修道院も看護治療がその活動の中心であった。祭壇画ではその病気として麦角中毒が取り上げられているが、例えば第一面の向って左面には、体を数本の矢で射抜かれた若き聖セバスチアンの形像がある。この人物はペスト感染（「矢」はその図像）からの庇護の聖人でもあったから、その意味では当然、複数の難病に対する医療行為がなされていたのであろう。いずれにしても重篤な患者がこの修道院付属の病院施設に連れて来られたと考えられ、初めて（また後にもくりかえし）この凄惨きわまりない十字架刑に処せられた瀕死の救い主と直面したのである。そして真にリアルな信仰的真実に触れたのである。

第一面には、向って左側に聖セバスチアン、反対側の右面には聖アントニウスの形像パネルが置かれている。そして中央面左には、衝撃と悲しみのあまり失神寸前の聖母マリアとそれを長すぎる右腕で支える若きヨハネ、狂わんばかりに必死に祈るマグダラのマリア、右側には死後舞い戻ったとしか読めない洗礼者ヨハネが救い主を指で指し示している姿、足元には胸から聖杯の中に血を注ぎ込んでいる小羊（この洗礼者のアトリビュート）が表現されている。そして真ん中には、巨大な断末魔のキリスト・イエスが鬼気迫る筆致で描き出されている。当時この施設に収容されていた重篤患者や同修道院を訪れた巡礼者など、多くの鑑賞者はこの画面をわが身に引き寄せてどう受けとめたのであろうか。

中央には、磔刑時に居合わせる聖マリア、ヨハネ、マグダラのマリアという設定、イエスの腹部を突き刺した槍の傷痕、洗礼者ヨハネの横にラテン語で書き込まれた言葉、「神の小羊」の図像などからして、この場面が主としてヨハネ福音書に基づいて描かれたことがわかるが、このイエスはマルコ福音書で「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」あるいはマタイ福音書で「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」（前者はアラム語、後者はヘブライ語だが、いずれも「わが神、わが神、なぜ私を見棄てられたのか」の意味）と語る、死ぬ寸前の救世主をとらえている。それは激烈な苦しみと今なお戦っている絶入寸前の姿である。拷問のごとく押し被せられたイバラ冠の棘はイエスの頭部の皮膚を引き裂き、そこからは血が流れ続け、体全体には鞭打ちによって刺さった無数のトゲが見て取れる。太い釘は両の手のひらと重ねた両足の甲の肉を破って貫き、そこからどす黒い血が伝い落ちている。槍で突かれたわき腹の傷からも血が流れ続けている。受肉者の目はすでに光を失い、唇は死者のように青ざめ、意識も朦朧としているが、それでも両手の五指は生きる意志を示して空をつかもうとしている。

鑑賞者はイエスがこの極限の痛苦をなぜ体験しているのかを思い出したか、あるいはその理由を修道士の解説によって想起させられたことであろう。それはヨハネ福音書の通奏低音である一人ひとりの人間に届くアガペー（神愛）である。患者も巡礼者もこの身悶えする救い主の姿を見て、自分の（罪ゆえに）身代わりとして十字架につかれた神の子の無私の愛に感動するというより、その責め苦のさまに戦慄し、はなはだしく驚愕して、自分が過去に犯した数限りない過ちを思い出し、その多くは痛悔し改心したことであろう。しかしこの苦悶する受難者は、第二面の向って右面に描かれる復活者に変容するのであり、極限の死と神秘的な復活は神的リアリティの切り離せない両面なのである。

グリューネヴァルトはまた、リアルな断末魔のイエス像を克明に描き出すことによって、鑑賞者と救い主が神の愛によって魂の内合一できることを意図したのだと考えられる。中世は盛期の「栄光のキリスト」像から、末期に至って「苦難するキリスト」へと、その信仰対象を変えていった。それは神中心の中世から、人々が教会の抑圧をのがれて人間らしい生そのものに目覚めてきたルネサンス期への移行とも重なるであろう。この線にそってキリスト教は、マイスター・エックハルトに見られるように、スコラ神学からも神秘主義を生んだ。それは、人間が自我（執着我）を克服することによって魂の内奥の神と一致する立場である。例えば、十四世紀のシュトラースブルクで活躍した、ドミニコ会の神秘家説教者ヨハネス・タウラーは、人間は聖霊の働きを受けて魂を毒された自我から浄化し、生涯イエスに信従して徳をみがく修練をし、そうする中でキリストの神性へと移行されるのだと教えた。もちろん論証する資料がないので推測するしかないが、こうしたキリスト神秘主義（Christusmystik）の修徳の道をグリューネヴァルトも画家として目指したのではないかと思われる。イーゼンハイム祭壇画にはそうした祈りに近い制作者の意図が感じられる。

1-3. グリューネヴァルトと「農民戦争」体験

イーゼンハイム祭壇画は1516年に完成した。グリューネヴァルトは今もマインツ大司教区の宮廷画家であったが、大司教はウリエルからホーエンツォレルン家出身の弱冠二十四歳のアルブレヒト・フォン・ブランデンブルクに交代していた。しかしこの若き大司教は歴史を揺がす「贖宥状」事件の当事者となる。つまり彼は、選帝侯でも有力権限を有するマインツ大司教位を得ようとしてローマ教皇レオ十世に聖ペトロ大聖堂の建設献金を行い、すでにこれを実現していたのだが、その後フッガー家の提案を受けて教皇から贖宥状の販売の許可を得、ドミニコ会士ヨハン・テツェルに販売させて、教皇庁の献金を続けながら自らの財を増やしたのである。

これに対して1517年、アウグスチノ隠修会士マルティン・ルターが、贖宥状の効力を問う「九十五箇条の提題」を提出して（アルブレヒト大司教に対しても）公開討論を呼びかけた。教皇庁はアウクスブルクでカエタヌス枢機卿にルターを審問させたが、ルターは

拒否し、以来宗教改革の前哨戦が始まった。教会はその間ルターに破門を警告し、神聖ローマ皇帝カール五世にルターの追放を要求するが、この若い司祭の影響はすでにカトリック教会の政策に不満と反感をもつドイツ諸侯や人民に及んでおり、皇帝も政治的決着を望むしかなかった。1521年のヴォルムス帝国議会でルターは異端者として教会から破門されるが、結局、1555年のアウクスブルク和議で皇帝はルター派を承認し、ドイツはカトリックとルター派に分裂することになった。この間の1524年にドイツ南西部では、ルターの宗教改革の運動を受けて、長年にわたり政治的不満を鬱積させていた農民層の反乱が起こった。しかし農民の勢力が暴動化すると、ルターは支援の立場から諸侯の力を借りて弾圧する側へと回ったのである。このいわゆる「ドイツ農民戦争」は一年余りで終結したが、農民層にはこのルターの裏切りが決定的なものとして強烈に意識された。

イーゼンハイム祭壇画はその各形像からもわかるが、カトリック信仰の所産である。つまりグリューネヴァルトはカトリック者として制作したわけである。しかしマインツ大司教の宮廷画家であったとはいえ、ローマ教皇庁の教会政策に対して批判的な心情を秘めていなかったとはいえない。むしろ多くの疑問を抱いていたのではないか。実際に彼は1526年にマインツ宮廷から最後の支払いを受けて解雇されるが、10月にアルブレヒト大司教は宗教改革に連座したことが判明した全臣下に対して、罰金支払いか罷免の処分を下した。グリューネヴァルトも懲戒を受けた一人であって、その後すぐにフランクフルト・アム・マイン市に逃れた。その後は絵画制作そのものは一切行わず、せいぜい噴水工事に携わっただけでいたが、ペストに罹患するとハレ市に移住し、1528年に同地で没した。知己であったデューラーと同じ死亡年であった。

グリューネヴァルトの百点を超える遺留品には、衣服や食器、契約書や紋章、ロザリオや磔刑像の他に、興味深いことに「ルターの二十七の説教文」「キリスト教信仰十二箇条の声明」などが見ついている⁸⁾。後者は農民戦争で指導者が「神の前には万人が平等である」というルターの教えを受け継いで作成した要求であった。この遺留品と解雇の事実から、われわれの画家がデューラーや彫刻家リーメンシュナイダーと同じく、体制としてのカトリック教会に対して批判的立場にあったと推定することができる。ただ自画像も一編の文書も遺すことなく、深い信仰を湛えた宗教画の中に隠れて誠実に生涯を歩み終えたグリューネヴァルトにとって、世の救いのために命を捧げたイエス・キリストへの信仰に分裂が生じたことは、煩悶の種となったであろう。彼はここにも人間の罪深さを見たにちがいない。それでも彼はすべてを神の独り子に委ねる純然たる信仰に生きてであろうと推測される。

2. 聖職者 E・シュタインと D・ボンヘッファーのナチス闘争と神秘的信仰

エーディト・シュタインもディートリヒ・ボンヘッファーも、「十字架上のキリスト」を深く見つめ、その受難に隠された秘義に深く思いを寄せた。この二人の聖職者としての

後半生は、このキリストとの出会いを核として展開したということが出来る。ナチス支配の十余年は未曾有の危機をもたらした。二人の聖職者はその中でイエス・キリストへの「信従」の真の意味を問い、自らに語りかける見えない神の声を聞こうとした。それはこの世の苦難のただ中で神の国を体験するという、神秘主義的な信仰体験であったと思われる。ここでは各々の人生を追い、その信仰に光をあててみたい。

E・シュタインは若き日は現象学者フッサールのもとで学んだ優秀の弟子であり、哲学博士としてハイデガーと共に学問的研鑽に努めた。しかしやがてユダヤ系ドイツ人としてカトリック信仰を得た後は、キリスト教的真理の探求に残りの生涯を捧げた。彼女は修道女となる道を選んで、女子カルメル会に入った。そのさいテレジア・ベネディクタ・ア・クルーチェという修道名を授けられたが、これは「十字架によって祝福されたテレジア」という意味であった⁹⁾。ここには、ユダヤ人出自のキリスト教徒であることの微妙な立場が暗示されている。彼女の信仰はイエスの十字架の「苦難」の意味を、自らに課せられた最重要問題として徹底的に問わざるをえないことになるからであった。そうして救い主の苦難をユダヤ人修道女として共に担うことが、彼女の信従のかたちとなった。以下ではこの間の消息を、彼女の手紙と最晩年の未刊『十字架の学問』(Kreuzeswissenschaft, 1942)で触れてみたい。

また次に、E・シュタインとは対照的に、プロテスタントの陣営のルター派（古プロイセン合同教会）から、非凡のドイツ人神学者であった福音派牧師D・ボンヘフファーの生き方を取り上げ、その死に至るまでのキリストへの「信従」のありようを検討してみたい。彼もE・シュタインと同じくキリスト者の運命を背負い、ナチスのユダヤ人迫害を強く批判し、抵抗運動に身を捧げる中で処刑された。彼はヒトラー暗殺計画に加担する中で、「神の前で、神と共に、神なしに生きる」という最後の確信に達し、いわゆる「成人した世界」(die mündig gewordene Welt)の信仰を得た。彼もその思索と行動の根拠を、父なる神に助けられずに十字架上で死んだキリスト・イエスのありように置いた。彼もE・シュタインと同様、「わが神、なぜ私を見棄てられたのか」と言いながら絶望死を死んだと見えるキリストの死そのものの中に——それはどうしても敗北死のかたちでなければならなかった——それと切り離せない真の復活を見出したのだと思われる。この十字架上の神の子の究極の「見棄て」の事態に神秘的意味を見出し、そこに自己の信仰が依拠するものを確認したのだと考えられる。二人はそれぞれの深い苦悩の末に神の視点へと突破し、この世が「永遠」(＝神の世界)を逆説的に含みこんだ「生きた現実」であるという生の深遠性に覚醒し、それぞれに託された神を「指差す」使命を生きたのだといえよう。

2-1. ナチスの教会政策と教会の反応

ヒトラーの意図は、ドイツ第三帝国による世界征服（領土拡大を含む）と優等民族アーリア人を頂点とする（いわゆる「ゲルマン神話」に基づく）人種主義の徹底であった。そ

ここでは黄色人種、黒人、ユダヤ人は否定され、民主主義、ボルシェヴィズムに対する敵意が露呈していた。1933年の時点でドイツの総人口のうち95%がキリスト教徒であり、カトリック、プロテスタント教会の比率は1対2であった。ヒトラーは先ずは権力浸透のために教会への宥和政策をとり、ナチス政権への賛同を得る必要があった。その上で国全体の「均制化政策」(Gleichschaltung)を推し進めようとした。

ナチスの人種論は、一般にA・ゴピノーやH・チェンバレンの影響を受けたハンス・ギュンターの『ドイツ民族の人種学』(Rassenkunde des deutschen Volkes, 1922)に基づくとされる。このナチス人種学者はその著書において「北方アリア人」の理想を創出し、高い水準の科学技術の面で最高レベルの潜勢能力を有するこの人種が危機を迎えているため、その原因であるユダヤ人種を排除して純化を追求する必要があるとした。そうしてユダヤ人を絶滅させるだけでなく、アリア人種内をも優生思想の観点から厳しく管理する(精神病患者や障害者、深刻な遺伝病患者の処分)ことを求めた。ヒトラーは名目上カトリックであったが——幼児洗礼を受けていた——ギュンターと類似のゲルマン信仰に立脚し、こう述べた。「私にも宗教心はある。しかも深い宗教心がある。摂理は人間を試し、摂理の試練に耐え得ないで碎け去るものに対して大事をなせとは言わないと確信している。選抜の過程で強者のみが残るのが自然の必然性である。いろいろな場面でうかがい得たドイツ民族は、極めて幸いなことに、強くかつ芯から健康である。」¹⁰⁾

ヒトラー内閣成立の当時、バチカンがドイツがボルシェヴィズムを食い止める反共の防波堤(防共領域)となることを期待し、ドイツと「政教条約」(Concordatum)を結んだ。これによりカトリック教会はドイツ国内での宗教活動を一定保証されたとして、安心した。しかしやがてナチスがキリスト教への攻撃政策を展開し始めると、教皇ピウス十一世は1937年3月、回勅「燃える如き憂慮をもって」(Mit brennender Sorge)を出して強烈な批判を加えた¹¹⁾。さらに1941年8月、ミュンスター市のフォン・ガーレン司教は説教でナチスの安楽死政策を厳しく弾劾した¹²⁾。これに対してナチスは、これまで以上のあからさまな攻撃をカトリック教会に向けることとなった。

当時ドイツのプロテスタント領邦教会はルター派が中心であったが、この中でいわゆる「ドイツ・キリスト者」(Deutsche Christen)が中心となって、キリスト教をナチズムと精神的に統合させる運動を興した。彼らはその中で、「ユダヤ的、非ゲルマン的要素排除」(『ブリタニカ国際大百科』)の立場をとり、ナチスに迎合した。この考えは、1935年のナチスの反ユダヤ的人種法であるニュルンベルク法成立の呼び水となった。

結局、両教会とも、内部に様々な例外はあるとしても、全体としてはヒトラー・ナチスの暴政の前に沈黙することになった。

2-2. ユダヤ系ドイツ人修道女E・シュタインの使命とその自覚

E・シュタインはブレスラウ出身(ドイツ帝国。現在のポーランド・ヴロツワフ)のユ

ダヤ系ドイツ人であったが、この時代この地に生まれたことが彼女の人生を決定づけた。ヒトラーは1933年の1月に首相（翌年8月、総統）になると、ユダヤ人問題に積極的に取り組み、矢継ぎ早に反ユダヤ法を制定した。すでに同年4月に「公務員再建法」「弁護士の開業に関する法律」「高等教育機関の学生数に関する法律」（非アール系学生数を49%以下に削減）、35年9月には「ドイツ民族の血と名誉を守るための法律」（ユダヤ人との婚姻と性交渉、帝国旗の掲揚、帝国色の衣服の禁止：いわゆる「ニュルンベルク法」）「ドイツ国市民法」（ユダヤ人のドイツ国市民権を剥奪）、38年8月には「氏名変更の法律」（ユダヤ人のミドルネームを男性は「イスラエル」、女性は「サラ」と決定）を発効させた。

ヒトラーは41年9月に全ユダヤ人に「黄色い星」の着用を義務づけ、10月には東部への移送を開始させ、42年1月にはヴァンゼー会議で最終的解決案の策定を命じた。そうして6月からはアウシュヴィッツでの大量ガス殺が始まり、それは45年1月まで続くことになる。E・シュタインの人生も、この運命に翻弄された。1933年にナチスからミュンスター市の教育学研究所での教育活動を禁止され、38年になるとはや国外移住もかなわず、ケルンの修道院からオランダ・エヒトの修道院に移り、42年の8月に姉のローザとともに逮捕された。知性と人格ともに秀でた彼女は、女性の社会参加と実践活動による社会的貢献の必要性についてヨーロッパ各地で講演し、積極的な活躍を見せていた。そのため今後も社会に大きな影響力を及ぼし続けると思われたが、結局その使命は別のものとなった。

2-2-1. イエスの十字架に重なる「贖罪死」の意味

教会とドイツ民族に対する彼女の使命は、ナチスによるユダヤ人迫害を通して明らかになった。ユダヤ系でありながらプロイセン的ドイツ性を意識して生きて来た彼女の心は、ドイツ人がドイツ国籍のユダヤ系住民に加えている恐るべき迫害に甚だしく傷つけられた。彼女は1933年10月のカルメル会入会前から、ユダヤ人である自分に課される「身代わりによる償い」という考えに親しむようになっていた。イスラエル民族はイザヤ書五十三章（第二イザヤ書；前539年頃）¹³⁾にあるように、苦難の歴史の中で自らを「贖いの神の僕」と同一視したが、キリスト教はこの身代わりをナザレのイエスの中に見ていた。彼女は1933年に教皇ピオ十一世に手紙を認め、ユダヤ人保護を目的とする回勅発布を求めたが——自らもナチスのユダヤ人迫害に激しい抵抗を示し、反ナチスの選挙活動などを行っていた——それが叶わぬと知ると¹⁴⁾、ユダヤ民族の苦難をキリストの十字架と意味的に関連させ、神はその手を彼女自身の上に重く置いたと判断した¹⁵⁾。

「すでに以前からユダヤ人に対する仮借ない措置については聞いてはいた。しかし今私に突然、神が再びご自分の民に御手を重く置かれ、この民の運命が私のものでもあ

るという光が生まれた。』¹⁶⁾

「私は救い主と語り、主に対して、それはあなたの十字架であり、いまユダヤ民族の上に置かれたことを知っていますと申し上げた。たいていの人々はこれを理解しないであろう。それでも全ての人の名においてそれを自分で引き受けねばならないような人々は理解することだろう。私はそれをしようと思う。主は私にその方法を示してくださいるはずである。黙想が終わったとき、私は自分の願いが聞き届けられたという確信を得た。しかし十字架を何において担うことになるのかは、私にはまだわからなかった。』¹⁷⁾

1940年にナチスがオランダに侵攻すると、エヒトの修道院に匿われた彼女と姉のローザに死の危険が迫った。1942年7月にオランダ司教団はユダヤ人の強制移送を公式に阻止する行動に出たが、その報復行動としてナチスはユダヤ系のカトリック・キリスト者を逮捕し（8月2日）、その内の114名がアウシュヴィッツに移送され（8月7日）、ただちにガス室で「特別処理」として殺された¹⁸⁾。E・シュタインは自らの苦難がイエスの磔刑死に極まる受難と重なっており、自らの使命をユダヤ教とキリスト教の間を架橋するためにユダヤ系ドイツ人キリスト者として死ぬことだと、「償いの死」を受けとめた。

2-2-2. E・シュタインの十字架の神秘的靈性

E・シュタインはたしかに悲劇的な死を迎えたのではあるが、他方では神との深い神秘主義的な靈性に生きていたことも指摘できる。その死はキリストのそれとパラフレーズされる、ユダヤ教とキリスト教の和解のための贖罪死であったであろう。しかし同時に、キリストの「見棄て」の死の真ただ中に、人間を愛するがゆえに自己を完全に否定し尽くした死そのもののうちに、人知を超えた神の愛の源泉を見出し、この世においてすでに永遠のいのちを体験していたのだと考えられる。肉体上の死を迎える前に、神のいのちを「前味」(vorsmak)として得ていたと理解できる。

最期の著作『十字架学』で彼女はこう語っている。

「この自然的な世界と超自然的な恩寵の賜物といった圧倒的な現実、さらに力強い現実を通して変革されねばならない。これは受動的夜に起こる。それなしには能動的夜は決して目的に達することはできない。生きた神のこの強き手は、魂を全ての被造物による絡みから解放し、自らへと引き寄せるために、介入せねばならない。この介入は、これまで光であり支えであり慰めであった全てから身を引いた、暗い神秘主義的な観照 (dunkle, mystische Beschauung) である。』¹⁹⁾

「信仰は魂の目の前にキリストを置く。それは貧しき方、卑しめられた方、架刑にされた方、十字架上で父なる神から見棄てられた方である。キリストの貧しさと見棄てられ（Verlassenheit）において魂は自己のものと再会する。渇き、嫌悪、辛苦こそが、魂に差し出される『純粹に靈的な十字架』である。魂がそれを受け容れるとき、それが優しきくびきと軽い荷であることを体験する。それは魂には軽やかに坂を上る杖となる。キリストが極まりない屈辱と否定にあって十字架上で、人間と神との和解と一致という最も偉大なことをなされたのを知れば、魂には、否定、『生身すなわち感性と精神での十字架死』こそが、神との一致へと導くことなのだという理解が目覚める。イエスとその死の見棄てられにおいて目に見えず理解の及ばぬ神の御手に自身をゆだねられたように、魂も、理解の及ばぬ神への唯一の道である信仰という真夜中の闇（das mitternächtliche Dunkel des Glaubens）に自己をゆだねるであろう。」²⁰⁾

「魂が神に向って上れば上るほど、自分自身の内にいっそう深く下りてくる。一致（Vereinigung）は魂の最内奥（im innersten der Seele）、最も深い魂の根底で（im tiefsten Seelengrund）起こるのである。」²¹⁾

またエヒトの修道院長、アンブロジア・アントニア・エンゲルマン宛ての1941年12月（推定）の手紙では、こう述べている。

「私は全てのことに満足しています。十字架学（scientia crucis）は、我々が十字架を心の根底から感じるができるときにだけ得ることができるのです。このことを私は最初の時から確信しています。私は、十字架よ、ようこそ、我々の唯一の希望よ（Ave Crux, spes unica）と心から言いました。」²²⁾

2-3. ドイツ人牧師 D・ボンヘッファーの思索とナチス抵抗運動

この明敏な人物（同じく、プレスラウ出身）は、ルター派「告白教会」のメンバーであり、政権に抵抗した数少ない聖職者の一人として神の意思を積極的に生き抜き、ユダヤ人の救済に牧師生命を賭けた。彼の長年の神学研究と聖書研究も、最終的に、第二イザヤが預言した約束の実現者であるイエス・キリストへの「信従」の質への問いに結実した。つまり、第三帝国が創造した恐怖国家に対して一人のキリスト者として徹底的に「異議申し立て」をする福音的行動となったのである。それは、「ドイツ・キリスト者」が宣言したユダヤ人キリスト者の排除ではなく、むしろ神の選びの民としてのユダヤ民族に対して敬意を抱き、彼らを「世界教会」の大切な仲間として、手を取り合って福音を宣べ伝え、キリストの業を受け継いでいくことであった。

彼はまた、ヒトラーの狂気の戦争に巻き込まれ、人間の尊厳を奪われ、野獣のごとき戦

争推進者の犠牲になっていく人々の現実の状況を、神が見過ごしていると見える事態、すなわち「神による見棄て」の意味を、父なる神が十字架上で御子に対して行った冷徹な見棄てと重ねながら、「見棄て」そのものを生きていく「成人の信仰」の掘下げを行ったことであった。

2-3-1. D・ボンヘッファーのユダヤ人理解と行動原理

ボンヘッファーは論文「ユダヤ人問題に対する教会」の中でこう述べた。

「ユダヤ人がその宗教帰属性とは関わりなく、ただその民族性ゆえに国家によって特別法の下に置かれるという、歴史において類を見ない事実は、神学者に対して、切り離して扱うべき二つの問題を課する。教会が国家の行為をどう裁くかということと、そこからどの課題が教会に対して生じるかということである。[...] そのことは国家に対する教会の行為の三重の可能性を意味している。(教会は) 第一に、国家に対して、その行動が国家的に合法たる性格を有しているかを問う、すなわち国家にその責任を負わせることである。第二に、教会は、国家の行為による犠牲者への奉仕である。教会は、あらゆる社会秩序の犠牲者に対して、たとえ彼らがキリスト教会に属していないとしても、無条件に援助する義務を負っているのである。[...] 第三の可能性は、車に押し潰された犠牲者を手当てするだけでなく、車そのものの進行を妨害することにあり (dem Rad selbst in Speichen zu fallen)。」²³⁾

この「車の進行の妨害」という考えが、結局彼の場合、ヒトラー暗殺のための行動となった。聖職者がモーセの十戒の第五戒「汝、殺すなかれ」を破らんとする決意の裏には、よほどの覚悟があったに違いない。彼はあえて、自ら罪人の立場にたったイエス・キリストに徹底的に信従する者になろうとしたのである²⁴⁾。

2-3-2. 「見棄て」に依拠する信仰観

D・ボンヘッファーはE・ベートゲに宛てた手紙(1944年7月16日)において、こう語った。

「神がいなくとも (etsi deus non daretur) ——この世で生きなければならないことを認識せずに、われわれは誠実であることはできない。まさにこのことをわれわれは——神の前で認識する。神自身がわれわれを強いてこれを認識するようにされる。このように、われわれの成人化は、神の前でのわれわれのより真実な状態をわれわれが認識するようにと導く。神は、われわれが神なくして人生を切り抜ける者として生きねばならないことを、われわれにお知らせになる。われわれと共におられる神と

は、われわれを見棄てられる神である（マルコ15章34節）。神という作業仮説（Arbeitshypothese）なしにわれわれをこの世で生きさせられる神こそ、われわれが永遠にみ前に立っている神なのだ。神の前で、神と共に、われわれは神なしに生きる。神は自らをこの世から十字架へと駆り立てられる。神はこの世では無力で、弱い。しかしまさに、ただそのようにしてのみ、神はわれわれのもとにおられ、われわれを助けられる。マタイの8章17節は実に明確に、キリストがその全能によってではなく、その弱さ、その苦難によって救われることを述べている。ここに、すべての宗教との決定的なちがいがあがる。人間の宗教性というものは、困窮するときこの世における神の力にすがらせるのであり、（それなら）神は機械仕掛けの神である。聖書は、人間を神の無力と苦難に向かうようにと指示する。苦難する神しか助けることはできない。そのかぎりでもわれわれに言えることは、[...] この世の成人性（Mündigkeit der Welt）への展開が、聖書の神への視野を開いてくれることである。[...]」²⁵⁾

さらに、

「教会は、情け容赦のない暴力の恣意的な行使、無数の罪なき人々の肉体的かつ精神的な苦難、弾圧、憎悪、殺戮を目にしなが、彼らのために声を上げ、手だてを見つけ、急いで助けに行くこともしないでいたことを、告白する。教会は、イエス・キリストの兄弟の中で最も弱く、最も無防備な人々の命について罪あるものとなった。」²⁶⁾

この手紙は、彼の没後に世界的反響を呼ぶことになった『獄中書簡集』に収められたもので、D・ボンヘフファーの〈新しい神学〉を仄めかしていた。彼は「ある書物の草案」の中でもこの〈新しい神学〉に触れている。彼は投獄後に「過去および未来との連続性が断ち切られた」と述懐しているが、この孤独と聖書の熟読、祈りの生活の中で、〔成人した世界〕〔キリスト教の非宗教的解釈〕〔真のこの世性〕の新次元を見出していった。1944年7月20日に（「ワルキューレ作戦」と呼ばれる）ヒトラー暗殺事件が挫折したとの凶報に接したときは愕然としたであろうが、自己の思いと神の意思のちがいを深く認識したにちがいない。その後10月8日に彼はテゲルからSS地下牢に移され、看守も悪名高きSS隊員に変わるが、その彼らからも「牧会者」として尊敬を勝ち得ることになった。

2-3-3. 機械仕掛けの神から「成人の信仰」へ

キリスト教はカトリックもプロテスタントも、神頼みの対象である「機械仕掛けの神」（Deus ex machina）を語ってきたが、人間は戦慄すべき孤独と社会の不条理にひとたび身をおいて、自己の実存を徹底的に掘り下げ、神の真の意思を求めねばならない。神への

信仰において「真実に」生きるということは、完全に自立し、自己に成り切り、真に責任を引き受けることでなければならない。その意味で、神の慰めを求めず、全ての苦難を神の意思ととらえ、肯定するところに、この牧師の真の信仰者の生き方があったといえよう。まさしくE・シュタインもこの神秘主義的な精神的境位と似た次元に達していたのではないであろうか。

ボンヘッファーは「機械仕掛けの神」を乗り越えた「成人した世界」を、「イエスの無力性における救い」のうちに見た。彼は先に引用した、十字架上で見棄てられたイエスの姿に集中し、われわれと共にいる神とは、われわれを見棄てる神だと理解する。イエスの十字架は、この世が神の後見から離れた世界、この世以外の何ものでもないことを意味するが、このイエスの絶望の言葉こそが、逆説的に「神の祈り」なのだと思われる。神への信仰がそう語らせていると判断できるのではないであろうか。

この世に受入れられなかった神は、イエスの十字架において、「無力者として」この世に臨在するのであり、この世の苦難を共にすることで、十字架から流れ出る力によって苦難を転換する。「他者のための存在」がイエス・キリストの決定的なメルクマールであるように、「他者のための存在」こそがキリスト者の真の生活を特徴づける。全てはイエス・キリストへの「信徒」(Nachfolge)にかかっている。ボンヘッファーにとっては、信徒はナチ支配下のドイツの状況では、ヒトラーに対する抵抗運動に参加することを意味していた。「他者のために」仕える生と苦難と死は、「他者のために」苦難を背負ったイエスの十字架のもとにとどまることを意味していた。この道を歩み、自らの苦難を担い通すことこそ、キリスト教の実存の内容をなすものであった。(了)

注

- 1) A. E. マクグラス、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』、教文館、2002年、p. 149。
- 2) 重要著作としては『ローマ人への手紙講解』(Der Römerbrief) や『教会教義学』(Kirchliche Dogmatik) I～IV巻などが挙げられる。
- 3) ヨハネ・パウロ二世は1998年10月11日に、彼女を聖人の位に挙げた。
- 4) シュタインは1942年8月9日にアウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所、ボンヘッファーは1945年4月9日にフロッセンビュルク収容所で殺害された。
- 5) この病は、神経系に対しては、手足が燃えるような感覚を与える。循環器系に対しては、血管収縮を引き起こし、手足の壊死に至ることもあるとされる。G. C. エインズワース、小川真訳『キノコ・カビの研究史』、京都大学学術出版会、2010年、p. 196参照。
- 6) Reiner Marquard, *Mathias Grünewald und der Isenheimer Altar*, Stuttgart 1996, S. 40を参照。なお同祭壇はニクラス・ハーゲナウアー (Niclas Hagenauer, 1460–1538頃) による厨子と彫刻 (第三面) とグリューネヴァルトの聖書場面から成立している。
- 7) R・マルカルトによれば、グエルシの紋章は、第二面左側のアントニウスとパウルの出会いの場面の左下に示されている。上掲書、同頁参照。
- 8) Reiner Marquard, *Mathias Grünewald und die Reformation*, Berlin 2009, S. 73ffを参照。

- 9) 改宗にさいしては——もちろん彼女は篤信のユダヤ教徒ではなかったが——アヴィラの聖テレジアの『自叙伝』から決定的な影響を受けた。
- 10) アイバンホー・ブレダウ編／小松光昭訳『ヒトラー語録』、原書房、2011年、p. 223。
- 11) 3月14日公開。この中で教皇は、ナチスが圧力をかけてカトリック教徒に教会から脱退させようと図っていることを強く批判した。この回勅はヒトラーを激昂させた。その後ゲシュタポは国内に配布された回勅の写しを回収しようとしたが手遅れであった。Dieter Petri/ Jörg Thierfelder (hg.), Vorlesebuch: Kirche im dritten Reich, 1995 Lahr, S. 352ff.
- 12) 8月3日の説教。この司教は、ナチスが障害者や精神病患者、遺伝病患者らの殺人を行っていることを暴露し、公然と批判した。また社会的弱者を「無用者」とする発想は、さらに傷痍軍人、老人などへと拡大解釈され、最終的には警察もそれを制止できなくなる、とその危機を訴えた。aa.O., S. 374f.
- 13) キリスト教会は、旧約聖書『イザヤ書』五十三章の以下の記述にイエス・キリストが預言されていると考えてきた。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。[...] それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。」(『新共同訳聖書』による)
- 14) E・シュタインは、教皇との個人的謁見はパチカンの混雑のため短時間しか許されないと知り、結局ローマへの旅を断念せざるを得なかった。
- 15) Anne Mohr/ Elisabeth Prégardier (hg.), *Passion im August (2.-9. August 1942)—Edith Stein und Gefährtinnen: Weg in Tod und Auferstehung—*, Essen 1995, S. 65. 彼女は1933年3、4月の個人的状況をこう回想している。またカルメル会入会後には、修道院長にこう心境を語っている。「愛するお母さま、本当の平和のために私を贖罪のいけにえとしてイエスの御心に差し出すことをお許しください。反キリストの支配が、できれば、新たな世界戦争に入ることなく破綻し、新たな秩序が打ち立てられることができますように。[...] 私は自分が無価値であるのを知っていますが、イエスがそれ(新たな秩序)を望んでおられます。」
- 16) aa.O., S. 65.
- 17) aa.O., S. 65, 67.
- 18) この間のオランダでのナチスの所業はこう整理できる。

1942年2月17日にオランダの「宗派間協議会」の代表者らは、ドイツ帝国委員のS・インクヴァルト博士に、恣意的な逮捕、マウトハウゼン強制収容所への移送、ナチス世界観の強制を抗議した(40年末にプロテスタント諸教会が結束。カトリック教会も41年末に合流)。7月10日にさらなる移送が判明すると、協議会は翌11日に請願を決定し、ラウターとシュミット親衛隊上級警察長官、クリスティアンゼン国防軍司令官に打電した。その内容は次の通りであった。「オランダの諸教会は、同国のユダヤ人を普段の国民生活から締め出さんとするこの通達に深い衝撃を受けていますが、新たにユダヤ人の男性、女性、子供たちなど家族全員を、ドイツ帝国とその占領地域へと連れ去るという通達に驚愕しています。何万もの人々に苦難をもたらすというこの通達は、オランダ国民の深い道徳感情と対立し、神が正義と憐れみの要求として打ち立てられるものに反することをもって、教会は貴

殿に、これらの通達を実行に移さないようにと緊急な願いを送ります。ユダヤ人キリスト教徒がこの通達によって、教会生活を営めなくなることを憂慮して、この請願は提出されます。」

これに対して以下の事態が起こった。

7月14日に上級警察長官シュミットは協議会委員と会談し、席上、長官は「1941年1月1日以前の受洗者は移送を免除する」というインクヴァルト帝国委員案を提示した。教会はそうした例外を受け入れず、常に全てのユダヤ人のために尽くす立場を堅持した。プロテスタント諸教会とカトリック教会は7月20日に抗議文をまとめ、26日の日曜日に説教壇から（帝国委員提案の紹介とともに）読み上げることに合意した。これに対しドイツ側は「読み上げないなら、受洗ユダヤ人に危害は及ばない」と虚偽の提案をし、オランダ改革派教会など主だったプロテスタント教会は譲歩した。しかしカルヴァン派教会やカトリック教会は、抗議文としての牧会書簡をまとめ、26日の礼拝で説教壇から読み上げた。

1942年7月27日の月曜日の午前に開かれたドイツ帝国委員の特別会議で、オランダの722名のユダヤ人カトリック信徒の殺害命令が「立ち退き」(Evakuierung)という名目で出された。8月2日の日曜日の大検索で、警察は男性、女性、子供、修道会員、一般信徒244人を逮捕した。完璧にシステム化された届出の記録データにより、実に簡単な処置であった。大半がまずアメルスフォールト警察収容所に送られ、ヴェスターボルクの通過収容所でその数は987人に増え、8月7日早朝にアウシュヴィッツ絶滅収容所に向け出発した。8月9日に到着後、振り分けをへて、多くがそのままガス室に入れられ、死亡する。

記録集『八月の受難』(*Passion im August*)は、8月2日逮捕のカトリック聖職者を中心とした29名の生涯と一週間の様子を、本人及び第三者の証言により構成している。E・シュタイン以外にも多くの人々が殉教したが、なぜ殺害された彼らの列聖が実現しなかったのかという疑念が残る。

- 19) Edith Stein, *Kreuzeswissenschaft*, Drueten 1983, S. 106.
- 20) aa.O., S. 106f.
- 21) aa.O., S. 137.
- 22) *Passion im August*, S. 70.
- 23) Dietrich Bonhoeffer, *Gesammelte Schriften 2*, hg. von Eberhard Bethge, München 1959, S. 48.
- 24) これはカトリックのアルフレート・デルプ神父（イエズス会）も同じであった。彼もヒトラー暗殺計画が頓挫した後ナチスに逮捕され、1945年2月2日にベルリンのプレッツェンゼー刑務所で処刑された。
- 25) Dietrich Bonhoeffer, *Widerstand und Ergebung—Briefe und Aufzeichnungen auf der Haft*, München 2013, S. 192f.
- 26) Dietrich Bonhoeffer, *Ethik*, München 2010, S. 130.